様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１０１０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ０３４３２

研究課題名（和文）災害支援研究：災害被害とその後の諸経験が適応状態に与える中長期的影響について

研究課題名（英文）The research of disaster psychological support:On the middle and long term effect toward adaptation state by disaster affect and several experiences after disaster

研究代表者
前田　潤（Maeda, Jun）

室蘭工業大学・大学院工学研究科・教授

研究者番号：９０３３２４７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、災害経験が中長期的に人々の心身に与える影響と、そこから生活を立て直し、ストレスに対処する適応過程を明らかにすべく2018年胆振東部地震災害、2020年の新型コロナ感染症、2022年ロシアによるウクライナ軍事侵攻という異なる災害事態による人々への心理学的影響と適応に関わる研究を実施した。
　研究結果は、新型コロナ禍で示される心身不適応状態は、地震直後と同様か、それよりも高いことを示し、経年変化は感染予防対策が、高いストレスを生むことを示している。また、2022年のロシア軍事侵攻後のウクライナ心理学専門家に対する遠隔グループワークにサイコドラマ手法が有効であることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、当初の計画にはなかった、新型コロナウイルスという感染症被害と地震災害による心身への影響比較調査が可能となったという点で、学術的意義が高いものとなった。また、この研究結果から新型コロナウイルスがもたらした心身の変調の程度が、地震直後の被災者よりも高い程度自覚され、新型コロナウイルス感染症対策の社会的行動抑制がストレス要因となっていることが明らかにされており、社会的意義ある結果となった。

研究成果の概要（英文）：This research aims to clarify the medium- to long-term effects of disaster experiences on people and the adaptation process to cope with stress and to rebuild their lives by the research on the psychological impact and adaptation of people to different type of disaster scenarios ; Iburi east earthquake in 2018,Covid19, the Russian military invasion of Ukraine in 2022. Research results show that the state of mental and physical maladjustment shown by Covid19 the same or higher than immediately after the earthquake, and changes over time indicate that Covid19 prevention method create high stress. We also showed that the psychodrama method is effective in remote group work for Ukrainian psychologists after the 2022 Russian military invasion.

研究分野：臨床心理学

キーワード：災害支援　災害被害　2018年胆振東部地震　新型コロナ　ウクライナ心理学専門家　適応状態　中長期的影響　遠隔支援

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

災害後の人々の適応状態の改善に寄与すべく、我が国で「こころのケア」として行われている精神保健および心理社会的支援活動が重要となるという認識は徐々に広がってきていた。日本赤十字社を始めとする災害支援専門団体や様々な支援団体が重要性を認識し、災害後の「こころのケア」の提供は必須項目になりつつある。しかし、支援活動の効果判定や有効性の検証は簡単ではなく、その効果は本来中長期的観点から検討されるべきものである。

２．研究の目的

そこで、本研究では、この災害の心身へ影響と様々な社会条件、支援活動との関連を明らかにすべく、研究代表者の生活圏で起きた 2018 年北海道胆振東部地震と 2000 年有珠山噴火災害の被災者を対象に災害の影響過程を災害被害の程度・受け止め方などの内的要因・様々な支援活動や生活条件、その後の人生エピソードなどの外的要因から検討することで、あるべき災害支援に指針を与える事を目的に、計画された。

３．研究の方法

実際には、本研究を計画した 2019 年当時では予測することもなかった新型コロナウイルス（Covid19）感染症が 2020 年から猛威を振るい、本研究が採択された 2020 年度から 2022 年度の研究計画を大きく変更せざるを得なくなった。また 2022 年にはロシアによるウクライナ軍事侵攻があり、結果的には本研究は、2018 年胆振東部地震災害、新型コロナウイルス感染症、ウクライナ軍事侵攻という異なる災害・戦争に関わる人々の心身の状態とその適応支援に関する研究を行うこととなり、大きくは二つの研究で次のような方法がとられた。
（なお、2000 年有珠山噴火災害にかかる調査研究は、病院施設の利用者を対象に計画されたものであったため、新型コロナの影響によりこれは実施できなかった。）

(1)2018 年胆振東部地震災害と新型コロナウイルス感染症の心身影響比較調査

研究代表者が 2018 年胆振東部地震災害当時に支援依頼があって介入することになった高校では、災害直後から数ヶ月後、数年後と同一チェック項目心身状態調査が継続して実施されていた。当初は、この調査項目の経年変化を追い、尚且つ心身不適応状態にある個人をこの調査項目から抽出して支援も行って効果を見ることを計画していた。しかし、新型コロナウイルス感染症が広がったため、新型コロナによる影響についても同一チェック項目の心身状態調査が継続実施されることになり、これによって地震直後と新型コロナウイルス影響後の心身状態の比較が可能となった。そして、さらに新型コロナウイルスの経年影響効果について縦断的に比較検討ができた。
新型コロナウイルスでは、対処法として実施が求められた感染予防策があるが、それらの予防策がもたらすストレス評価が実施され、感染予防策自体が与えるストレス度とその経年変化についても合わせて検討が可能となった。

(2)ロシアの軍事侵攻によるウクライナ支援者への支援活動有効要因の検討

ウクライナで被害にあっている住民や他国に避難する人々を支援するウクライナ心理学専門家に対するサポートあるいはスーパーバイズによる支援の呼びかけが IAGP（International Association of Group Psychotherapy and Group Process:国際集団精神療法・過程学会）の ML で行われた。この呼びかけに応えて研究代表者は、北海道内で支援チームを立ち上げて支援活動に参加。当初世界各国の専門家が参加し 35 のグループが編成された。各グループには、ウクライナの心理学専門家が６-10 名が参加しグループ支援活動が実施された。支援活動は全てズームによる遠隔支援であった。
研究代表者は、この遠隔支援によるグループ支援活動を、２週間に一度のペースでサイコドラマという手法を用いて実施した。1 年を経過して当初世界で 35 あった支援グループは 12 と減じた。研究代表者が主催するサイコドラマを基本とするグループ活動の活動内容、メンバーの感想などから、ongoing なトラウマ体験只中にある人々を支える活動の有効要因の検証を行った。

４．研究成果

(1) 2018 年胆振東部地震災害と新型コロナウイルス感染症の心身影響比較調査

2018 年 9 月の地震から１ヶ月を経過して実施されたある高校での心身影響調査の結果と、新型コロナ感染症による休校措置が開けた 2020 年 7 月および新型コロナから 1 年以上が経過した 2021 年 9 月に実施された同一高校での心身影響調査の結果をまとめたのが図１である。各年の標本数は男女合わせて 2018 年 9 月：67 名、2020 年 7 月：60 名、2021 年 9 月：63 名である。
この調査結果の特徴は、有意差が得られた項目が、「イライラ」と「中途覚醒」であり、他で

は有意差が得られていないということである。地震災害直後では、「中途覚醒」という睡眠障害が2021年に比べて有意に高く、それ以外「不眠」「イライラ」「体調不良」「不安・悲しさ」「食欲」で差がない。
これは地震直後と同程度に新型コロナは心身に影響を与えていることを示している、と考えられる。
　新型コロナは、地震災害のように直接被害をもたらすものではない。なぜなら、新型コロナ感染症が蔓延化し始めた2020年7月にこの高校や地域に新型コロナ感染症者はいなかったからである。それでは、何が、彼らの心身状態に影響を与えているのであろうか？

図１

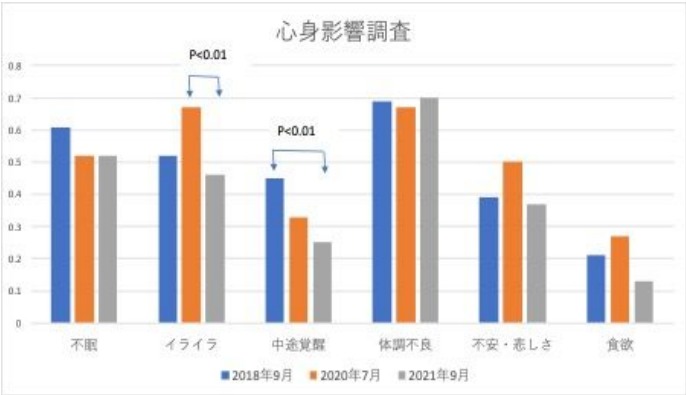

図２

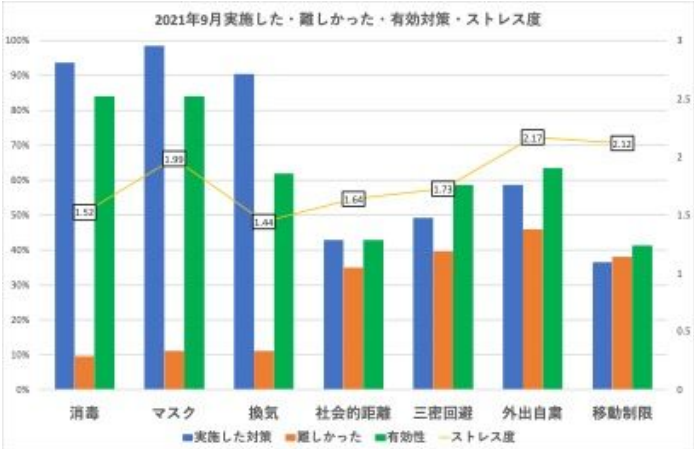

　図２は、新型コロナ対策として実施が求められた「消毒」「マスク」「換気」「社会的距離」「三密回避」「外出自粛」「移動制限」の中で実施したもの・実施が難しかったもの・柚香だと思うもの、そしてそれらのストレス度を高校生に尋ねたデータのまとめである。これによると実施が難しかったのは対人関係や行動制限に関わる項目、「社会的距離」「三密回避」「外出自粛」「移動制限」であり、「外出自粛」「移動制限」で高いストレス度を示している。
　こうした新型コロナ予防のために用いられた対策自体の実施の難しさや行動制限のストレスが高校生の心身状態に影響されたものと推察され、対策としての行動制限に対するストレス緩和という観点もまた重要であることが示唆される結果が得られた。

(2) ロシアの軍事侵攻によるウクライナ支援者への支援活動有効要因の検討
　世界各国で立ち上げられた35のグループのグループリーダーが集まってズーム会議が開かれている。それによるとグループリーダーが直面した難しさとして次のようなことが挙げられた。
　①グループ構造の危うさ
　　・サポートグループを実施するつもりであっても、連絡がなく欠席したり途中で抜けたりする参加者がいて、グループとしての安定性が乏しい。
　②ウクライナ側の参加者が減っていく
　　・①とも関連しているが、参加者が何の連絡もなくどんどん減っていくというのである。
　③ 通信・連絡・コミュニケーションの難しさ
　　・wi-fiなどの通信条件が不安定で、セッション途中で切れてしまったり、通訳が介在することでタイムリーな介入ができなかったり、会話理解が難しいことがしばしばある。
　④語られる体験内容の重さ
　　・PTSD治療の経験はあるが、ongoingトラウマ体験の中で何をしたらよいかわからない。
　　・セラピストとして無力でただ泣くしかなかった。
　これらの課題に対して、サイコドラマを基本技法として行っている研究代表者のグループは、それぞれに対して次のような構えと取り組みで実施してきた。
　①グループ構造の危うさ②参加者が減ること③通信・連絡・コミュニケーションの難しさ、については、サイコドラマとして「今ここで」を大切し、そこにいる参加者と何をするか、に主眼を置いた。グループに出たり入ったり、通信の不安定な中でのアクシデントはアクシデントとして受け入れ、それを問題や困難と考えない。それは通訳を介しているということについても同じで、そのような制約ある構造で行われるグループと受け入れ、出来ることに重気を置こうとする。
　④語られる体験内容の重さ、については、サイコドラマでは、そのような辛く悲しい中でもなお、グループに参加し、何かを表明してくれているその力の源泉に注目する。つまりongoingなトラウマ体験の中でもなお私たちを支える何かがあり、そこに注目しようとするのである。体験そのものを変える力はなく無力であって、涙しかなくても、それはセラピストとしても精一杯の姿であり、そこにグループが共有できる源がある。
　このサイコドラマの捉え方が、グループ継続の有効要因になっていると考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 上村 浩信，木元 浩一，清末 愛砂，工藤 ローラ，前田 潤，森田 英章，小野 真嗣，ペレム ジョン ガイ，塩谷 亨，サステナンス スコット ナイジェル，山路 奈保子	４．巻 71
２．論文標題 ひと文化系領域教員によるコロナ禍における遠隔授業の取り組みについて	５．発行年 2022年
３．雑誌名 室蘭工業大学紀要	６．最初と最後の頁 39-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 前田潤,チョウルモウ　ゲリレ	４．巻 72
２．論文標題 災害ストレスという観点から見た新型コロナの影響 －2018年胆振東部地震と比較して－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 室蘭工業大学紀要	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 前田潤、松野千代美、森光玲雄、定池祐季
２．発表標題 災害としてコロナ禍の支援を考える
３．学会等名 第37回日本精神衛生学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 CHAOLUMENG GERILE,前田潤
２．発表標題 胆振東部地震被災高校での地震および新型コロナ感染症の影響調査
３．学会等名 北海道教育学会第６６回研究発表大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 荻本快、藤信子、前田潤、榊恵子、藤沢美穂、水野高昌
２．発表標題 日本学術会議会員任命拒否問題を集団精神療法家が考える ―第２回 トップダウン型の組織運営について―
３．学会等名 日本集団精神療法学会　第39回学術大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 前田潤
２．発表標題 新型コロナウイルスに対しての基本的な理解と対処について
３．学会等名 北海道臨床心理士会　感染症対策本部（招待講演）
４．発表年 2020年～2021年

１．発表者名 荻本快、藤信子、前田潤、神宮京子、桜庭拓郎
２．発表標題 日本学術会議会員任命拒否問題を集団精神療法家が考える ―個人・組織・社会の観点から―
３．学会等名 日本集団精神療法学会第38回大会 集団精神療法の知を問う
４．発表年 2020年～2021年

１．発表者名 前田潤
２．発表標題 トラウマ体験後の人生を支えるために―PTGとネガティブ・ケイパビリティー
３．学会等名 The 13th International Symposium on Post Disaster Psychological Aid in Asia（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年～2022年

１．発表者名 前田潤、築田昌明
２．発表標題 サイコドラマの可能性を探る(1)-ズームによるウクライナ・サポートグループの実践-
３．学会等名 日本心理劇学会第28回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 西村馨・前田潤・鈴木純一・磯田雄二郎・関百合
２．発表標題 日本の「グループ」を国際的視点で考える
３．学会等名 日本集団精神療法学会　第40回学術大会
４．発表年 2022年～2023年

１．発表者名 前田潤・荻本快
２．発表標題 「日本学術会議会員任命拒否問題を集団療法家が考える」をドラマ化する
３．学会等名 日本集団精神療法学会　第40回学術大会
４．発表年 2022年～2023年

〔図書〕　計2件

１．著者名 清末愛砂、池田賢太、阿知良洋平、川村雅則、辻智子、石井佐登子、小野寺信勝、前田潤、坂東和之、松本ますみ、吉澤文寿、殿平善彦、小田博志、葛野次雄、松本徹、永井真也、稲村隆之、那須守、亀田正人	４．発行年 2021年
２．出版社 法律文化社	５．総ページ数 153
３．書名 北海道で考える＜平和＞　歴史的視点から現代と未来を探る	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	Oakland University(Michigan)	Department of Psychology	Free from PTG laboratory	他2機関